

## R 29

## 肺癌を含む重複癌の22剖検例

浜松医科大学病理 東京大学医学部病理 森田豊彦

材料及び方法：東大医学部病理学教室の1958年度（昭和33年）から75年度迄の18年間の7867剖検例を使用した。剖検輯報，解剖台帳，剖検記録，保存臓器，組織標本及び臨床病歴を調べ，悪性腫瘍例を選出し，更にもうその中で重複癌症例を検討の上厳選した。

結果：1. 頻度 この18年間の重複癌症例は121例，男性78例，女性43例で全解剖例中の1.5%，男性例の1.6%，女性例の1.5%を占め，全悪性腫瘍中では3.3%，男性例の3.2%，女性例の3.4%を占めた。121例中肺癌を含む重複癌は22例（男18，女4例）で，うち肺癌を主とするもの15例（男11，女4例）で，この18年間の肺癌409剖検例中の3.7%（男性例の3.6%女性例の3.8%）を占めた。

肺癌を従とする7例は，胃癌4，肝癌2，咽頭癌1例との合併である。

全体に四重癌以上はなく，三重癌は10例で，うち肺癌を含むもの3例である。

同臓器の二重癌は11例で，肺，胃，肝癌の各3例が含まれた。

2. 年令別 肺癌を含む重複癌例の平均年令は67才（男68，女63才）で，肺の単独癌のその60才（男61，女58才）より高く，20～40代例が皆無なのが注目され51から81才迄であった。男性では60と70代が各8例で50と80代が各1例であった。肺癌を除く重複癌では10才代から症例があった。

3. 臓器別 胃癌10，甲状腺癌4，肝癌3例の他，盲腸癌，咽頭癌，喉頭癌，腎臓癌，細網肉腫各1例との合併癌である。肺癌を除く重複癌では，胃39，甲状腺30，肝21，乳腺9，結腸9の各癌が多かった。

4. 同時性と異時性 同時性17，異時性5例で，後者では胃癌2，甲状腺，肺，喉頭癌各1例の治癒後に肺癌を含む他癌の重複があった。

5. 潜在癌或非活動性癌は肺癌5（扁平上皮癌4，腺癌1例），胃3，甲状腺，盲腸，肝及び腎癌の各1例であった。

6. 組織型 前記非顕性肺癌5例と肺癌を主とする重複癌（含：肺癌の重複癌3例）17例の延べ25肺癌の組織型は扁平上皮癌15，腺癌8，小型未分化細胞癌2例で，肺癌剖検例全体の扁：腺：未の約1：2：1に比し，扁平上皮癌が特別に多く，腺癌と未分化癌が少ないが目立った。

今回の肺癌同志の重複癌3例の組織型は未と扁，扁と腺，腺と扁の各1例で重複性の証明上余り問題とならなかった。

## R 30

## 肺癌との重複癌に関する臨床的観察

新潟大 放射線科

○酒井邦夫，佐藤俊郎，北島 隆

新潟大 胸部外科

広野達彦，小林 稔

昭和45年より昭和50年までの6年間に新大放射線科で取り扱った原発性肺癌147例，および昭和48年より昭和50年までの3年間に新大胸部外科で手術を行なった原発性肺癌45例，合計192例を対象として，臨床的に観察された肺癌との重複癌（白血病，悪性リンパ腫を含む）の実態を調査した。

## 1. 発生状況

第1癌が肺癌で第2癌が他癌であったもの3例，第1癌が他癌で第2癌が肺癌であったもの5例である。その他，両癌ともに原発性肺癌と考えられるもの1例がみられた。すなわち，肺癌192例中9例（4.7%）に，何らかの形の重複癌が観察されたことになる。

## 2. 性別・年令

男7例，女2例。年令は57才より76才まで，平均64.9才である。

## 3. 両癌の発生間隔

組織診または細胞診で病理学的に診断のついた時点を目安にとると，両癌の発生間隔は，6カ月以内3例，6カ月以上1年以内2例，1年以上4例である。6カ月以内のものを同時性とすれば，同時性3例，異時性6例となる。

## 4. 重複の組み合わせ

同時性重複癌3例の組み合わせは，肺癌（小細胞性未分化癌）－結腸癌（腺癌），悪性リンパ腫（細網肉腫）－肺癌（腺癌），喉頭癌－肺癌である。異時性重複癌6例の組み合わせは，肺癌（小細胞性未分化癌）－直腸癌（腺癌），肺癌（扁平上皮癌）－白血病，肺癌－肺癌，直腸癌－肺癌，喉頭癌－肺癌，肺癌－肺癌である。

## 5. 放射線治療との関係

第1癌に対する治療は，放射線治療6例，手術3例である。第1癌に対し放射線治療を行なった6例の内訳は，肺癌3例，喉頭癌2例，悪性リンパ腫1例である。第1癌に対する放射線治療開始後第2癌の診断されるまでの期間は，6カ月以内4例，1年以上2例である。照射組織内からの発癌例は認められなかった。